



【令和8年「土地月間」作品コンテスト エッセイ部門】

ピカピカの土地

若狭 早

大きくなったら、ぼくはパン屋さんを開きたい。やきたてのパンのにおいにあふれて、パンをえらぶお客さんがワクワクするようなお店にしたい。どんな間取りのお店にしようか、お絵かきしながら考えていると、「お店にぴったりの土地をさがさないかね。」お母さんにそう言われて、ぼくは「お店をたてるためには土地がひつよう」だと知った。お店もお家も、たてものは土地の上にあるのだ。そのことに気づいてから、なんだか身の回りの土地が気になるようになった。

ぼくは毎日バスに乗り、小学校に通っている。お家の近くのバスていは「あれた土地」の前にある。かべがボロボロの空き家、ざっ草がのび放題のお庭。その空き家はお店として使われていたらしい。しかし、二階にのこったお店の名前は色あせていて読めない。使われなくなって何年もたっているようだ。

学校から帰るのがおそくなった冬の夕方。バスていに着くと、こわい感じがした。こんなに暗い時間に「あれた土地」を見るのは、はじめてだった。かべのわれ目から何かが見てくるような……まどのクモの巣がゆれて近づいてきたような……。見れば見るほど、ふあんになるすがただった。

大切にされていない土地は、こうやってあれてしまう。すると人がどんどんはなれ、お手入れされずにもっとあれる「あくじゅんかん」が生まれてしまう。この土地を大切にしてくれる人はいないのだろうか。バスていの前にあって、お店になればお客さんが通いやすい場所なのにもったいない。ぼくはまだ子どもなので、土地の持ち主にはなれない。

春になり、その日はとつぜんやってきた。ついに土地を利用する人が見つかり「あれた土地」が生まれかわることになったのだ。毎日リフォーム会社の人に来て、空き家をきれいにしてくれた。われ目が走っていない、真っ白なかべ。クモの巣がはっていない、ツヤツヤのまど。今までのすがたが思い出せなくなるくらいの大へんしんだった。

ぼくがとくにうれしかったのは、お庭をきれいにしてくれたことだ。「あれた土地」の春のお庭には、たくさんのざっ草にまぎれてオレンジ色の花がさいていた。それはナガミヒナゲシという花で、さわるとかぶれるほどのドクがある。空き地からナガミヒナゲシのタネがとんできて、自分のお庭で勝手にふえてこまっている人もいる。土地はお手入れしなければ、まわりのかんきょうまでかえてしまうかもしれないのだ。

ぼくのお家の近く、バスてい前の土地はかがやいている。リフォームが終わり、新しいお店を開くじゅんぴも進んでいるようだ。だから夕方に見ても、ぼくはもうこわくない。土地を大切にしてくれる人ができて本当によかった。生まれかわったピカピカの土地には、金メダルがぴったりだ。